

まんだら通信

第244号 (通巻278号)

平成28年11月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



まだ間に合います

日本は、このところ少し…、いや大いに病んでいっているように思えてなりません。
自分の思い通りにならないといつて、子供が親を殺す。泣きやまない我が子を、折檻の果てに床に叩きつけて死なせる。やがては子孫が莫大なツケを払うことを分かっていながら「子供手当て」、「アクアライの割引」、などのおいしいことを言う政党に政権を任せる。何年か前に、日比谷公園の年

末年始の『派遣村』というのがありました。運悪く職を失い、この寒空に寝るところも食事も出来ない人が、心置きなく勤め口を探せるようにと役所が作ったものです。ところが実際は、村の中の窓口で職探しをした人は、たつたの一割だったとか。

つまり殆どの人は職探しの気持ちなどなく、ただで寝泊まりしただけということ。この費用の元は税金です。「待遇はどうでしたか」と聞かれて、「まあまあでした」とカメラの前で返事する始末。短い日にちとはいえ他人様のお情けで暮らしているながら、なんとという返事ですか。つい先ごろ、インターネットの投稿欄に「保育園落ちた日本死ね」と、国の責任を問いただした人がいて、一時話題になりました。

共通していることは、自分には何が出来るかを考える前に、国が何とかしてくれという、本来の日本人なら一番忌み嫌う乞食根性、『恥』を忘れた甘えではないでしょうか。

ホントを言うと、『三つ子の魂百まで』というように、小学校に入る前までは、我が子は手許において、つきつきり育てるのがその子のために一番良いと、昔から言われています。授かった子供を育て上げることは立派な仕事なんです。それでは暮らしが成り立ちませんというのなら、インターネットとパソコンを使って、今住んでいる場所で、自分の能力に応じて出来る仕事が沢山あります。それでも私は子供を預けて働きたいというのなら、過疎の町や離島に移住する

のはどうでしょうか。家賃の安い公営の住宅を用意し、農業、漁業その他、自立までの一定の期間、自治体が一切面倒を見てくれる制度があるということ。自然環境と人情が豊かで、子育てには持つてこいだと、私は思うのですが、あなたはどう思いますか。

こういう所で伸び伸びと育てば、元々日本人が持っていた思いやる心が豊かな人たちが、もつと増えてくるのではないのでしょうか。今のままでも日本人は素晴らしい、という実例があります。大分県国東半島の過疎の集落に住んで、外国人向けの旅行会社を営む、イギリス出身のポール・クリスティアン。十日で五十万円という、決して安くはない料金で、棚田や里山など、住んでいる人には面白くも珍しくもない所を案内して歩きます。食事も土地の人が普段食べているもので、お客さん向けの特別のものではありません。これが外国のお客様には大変な人気で、全国を年間三百回以上案内して喜ばれているということ。日本人は自分では気づかないけれども、相手を思いやる心が豊かで、これは他の国にはない『観光資源』だとポールさんは言っています。そう言われても当たり前すぎて、私は未だに半信半疑なのですが…。

上の写真はそのようなコースの一つ、四国の過疎の村で、ポールさんのホームページから拝借したのですが、このどこが素晴らしいのかと思ってしまう。ところで、日本には国が減るかも知れないという瀬戸際が三回ありました。蒙古襲来と幕末の黒船来航、そして大東亜戦争です。大東亜戦争では負けはしましたが、吉田茂首相ほか「戦争で負けても外交で勝つ」と時の政治家たちもがんばって、亡国の悲劇を免れました。

三回とも運不運、時の勢いというものはあるでしょうが、何よりもみんなの気持ちの底に国を守るという気概があったからだ、私は思っています。これらは何れも外からの力でした。

あれから七〇年あまり。日本は、中国やアメリカなどに較べて国の大きさ、地下資源、人口と、何れも小指の先ほどしかありません。不況で困っている、格差が益々大きくなったといえながら、本当の意味での衣食はいまありませんし、「お金がなくなつたので、今月から一日二食にしました」という話も聞かれません。それどころか、日本はいまだに『経済大国』の地位を失っていません。

年末年始の高速道路の渋滞は相変わらず。すべきことをした上で、他人さまと折り合いをつけて生きることが、いつの時代でも大切なのですが、人権やら個性やら平等ばかり主張するので、かえってぎくしゃくするのではないのでしょうか。では、どうすれば、日本人がもともと持つていた他人への優しい心を取り戻せるか。その一つは『江戸時代に学ぼう』ということ。『江戸時代の殆どの人は、思っていることも言えず、食うや食わずで縮こまつていた』というのは真つ赤なうそで、本当は日本中が今以上に自由で輝いていた時代でした。

浮世絵は歌舞伎と並ぶ庶民の芸術ですが、その勝れた技法や目の付け所がヨーロッパの画壇をビックリさせ、ジャポニスムの草分けになりましたね。印象派で有名な画家たち、例えばモネ、ルノワール、ゴッホ、ゴーギャンその他は、みんな浮世絵の影響を受けているそうです。治安の良さも世界一でした。

江戸の人口は世界一の百万人以上でしたが、正規の警察官に当たる『八丁堀の旦那』つまり『町方同心』は北と南の奉行所を合わせて、たつたの十二人だったそうです。町方同心は、それぞれ自分の給料から五人程度の、捕物帳でいえば銭形平次にあたる『目明かし』を抱え、目明かしは何人かの『下つ引き』を抱えていたそうですが、一月置きの勤務ですから、百五十人足らずの警察官で間に合ったということですね。もう一度立ち止まって、日本の素晴らしさに自信を持ちたいものだと思います。

につぼん人情小斬 三遊亭鳳豊
第四十九話 お巡りさん

相変わらず、凄惨な事件が続きますね。

これだけ殺人事件が多いということは、やはり、日本人の心はかなりずさんでいる証拠なんじゃないでしょうか。たしかに不景気ですし、格差も次第に広がっています。ただ、同じ貧乏でも、私が子供の頃に比べて、なんだか心まで貧しくなってしまうような気がいたしますが。

ええ、私の家も貧しかったですからねえ。借家の四畳半で、子供の頃、私は弟と同じ一枚の布団で互い違いになって、寝ていましたからね。それでも、なんだか平気だった気がします。

先日、何気なくケーブルテレビを見ていましたら、『警察日記』という昔の映画をやっていました。ご存知の方、いらつしやいますか？ 昭和三十年頃の映画で、もちろんモノクロでございました。

最初は「なんだ、ずいぶん古い映画をやっているな」と思ってたんですが、これがなかなかいい映画だったのです。今日は、その話をしましう。

会津磐梯山の麓の田舎町の警察署。

田舎といえども、毎日、いろいろな事件が起こって、警察署はかなり忙しい。

そんなある日、森繁久弥扮する吉井巡査が、まだ幼い少女ユキコと赤ん坊の姉弟の捨て子を発見するんですが、いくら探しても親は見つからない。しかたなく、街一番のお金持ちの料亭の女将に赤ちゃんを預け、幼いお姉ちゃんを自分の家で預かります。

吉井巡査の家も子どくさんで、たまたま赤ちゃんが生まれたばかり。

それでも、「子供一人増えたってたいして変わりはないわよ。かわいそうだから預かってあげましょ」と巡査の奥さんがいうんです。

その翌日、今度は万引き犯が警察に連れてこられるんですね。若いお母さんで、背中に赤ちゃんを背負って、小学一年生の子供を連れて。もう見るからに貧しそうな母子なんです。

「何を盗んだんだ」と聞くと「すみませんでした」と泣きながら、小さな子供用の長靴を差し出すんです。これから会津は厳しい雪の季節になる。それなのに、子供に長靴を買ってあげられない。つい、万引きをしてみましたというわけです。雪道をぼろのズックじゃかわいそうですからねえ。

事情を知った巡査は、長靴を取り上げると、被害者のマーケットの主人に言うんですね。「おい、商品が戻ったからいいだろう」と。商店主も「へえ」とかいつて、出てゆくんです。

「いいかい、お母さん。どんなに貧乏でも他人様のものを盗んじやいけないよ」と説諭して、その日は帰らせるんです。

それから数日後、今度は男の置き引きが捕ま。これは留置場に入れられて、本格的な取り調べが始まるんですが、その翌日、無銭飲食で親子が警察に突き出されてくるんです。

「なに、無銭飲食？」といいながら、巡査が取り調べに入ろうとして、犯人を見ると、以前、万引きで捕まった親子なんです。

「なんだ、おまえたちか。ダメじゃないか」

巡査が大きな声を出すので、小学生がお母さんの体の陰に隠れようとします。巡査は少し反省して、「僕、何を食べたんだい」とやさしく聞くんです。

「ふーん、おいしかったか。食べたのは、それだけか」

「ラムネ……」

「そうか、ラムネも飲んだか。お母さんは何を食べた」

そう聞くと、子供が小さな声で答えるんです。「母ちゃんは、何も食べていない」

聞けば、満州からの引揚者の一家で、夫は一週間前に仕事を探してくると言って帰って来ない。お金は一銭もない。「母ちゃん、おなかのすいたよ」と泣く子供を見るにしのびなくて、自分は食

べなくとも子供にはおなかいっぱい食べさせたいと、悪いとは知りながら無銭飲食を働いたと告白するんですね。今度は二度目ですから、巡査も名前を聞きます。

「お父ちゃんの名前は？」
すると、いま、留置場に入っている男なんです。

「お父ちゃんは、いま、牢屋にいる」と言つて、家族が涙の再会です。

巡査は署長に相談して、反省をしているというので、男を留置場から出してあげ、「いいか、生きていくことはつらいだろうけど、決して家族は離れてはいけませんよ」とやさしくお説教をしながら、自分の財布からなげなしの小遣いを出して、言うんです。

これで、まず、みんなでいっしょに食事をしなさい。それでおなかがいっぱいになってから、これからのことを考えなさい。いいか、決して離れちゃダメだぞ」

一家は、頭を深々と下げて、警察署を出ていきます。

そんなある晩、巡査の家で預かった少女が行方不明になってしま。真つ暗な寒い夜道を少女は、弟が預けられた料亭を探してトボトボと歩いていくんですね、目に涙をいっぱいためて。そして、探して料亭の入口にたざんんでいると、それを女将が見つけて、「ああ、こんなに小さくても、弟が心配なんだねえ。いい子だよ。いいよ、今日からうちでいっしょに暮らそうね」と言っているところに巡査がやってきて……。

と、まあ、そんな映画だったんですが、映画だとわかっているんですが、なんだか胸が熱くなりましてね。

いま、こんな警察署もないし、巡査も町の人たちもないでしょうね。

心がカサカサに乾いた時には、古い映画を見て、自分たちの子供時代を思い出しながら、心に潤いを与えてあげませんか？

MOKU出版三遊亭鳳豊さんのご労作です。

今月は最新号が、何故かまだ届いていないため、以前のものを再掲しました。



尚、捕物帳によっては、同心は賄賂を強要するような書き方をしますが、グラバーさんは長崎の豪商で、島津藩、その他の諸藩や幕府と莫大な取引をしましたが、賄賂を要求されたことはなかったと話していたそうです。その伝統は現在の公務員にも続いていますね。

▼木枯らし一番が吹くこの頃、空の色を写したかのようなこの野草が咲きます。

シソの仲間かと思ったのですが、どうも違うらしい。どなたか名前を教えてください。

2016.11.09 龍渉

く人情に弱い人柄がとても自然で、毎回録画してゆっくり楽しんでいました。

『相模の彦十』の猫八さんを始め、わき役が芸達者でいいですねえ。原作者の池波正太郎さんは、食い道楽だったのか、シャモ鍋屋の『五鉄』のシャモ鍋など、見ているだけでだれが出そうなお味がありました。1ページ目に書いた通り、江戸は世界一治安が良い町でしたから、血なまぐさい押し込み強盗が、毎週起きるなど考えられないことですが、そんなことは少しも気にならないお芝居でした。

来月はこのシリーズが終わるということで残念です。他の俳優が主役のシリーズもあるのですが、吉右衛門さんが一番です。

▼あつという間に今年もあと2ヶ月たらず。真冬のような寒い日が続いたり、体調管理が大変です。▼今日はアメリカ大統領選挙の開票日。まさかと思ったトランプさんが当選しました。円高が急騰し株安が進んで、世界中が大混乱になるかも知れません。

これはイギリスがEUから抜けた時以上のショックになりそうです。龍芳がさっき千葉銀のATMに行ったら「為替が大きく変動していますから、必要の方は窓口にお出で下さい。」と張り紙があったそうです。

▼中村吉右衛門さんの、フジテレビ『鬼平犯科帳』を毎週欠かさず見っていました。胸のすくような太刀さばきも然ることながら、悪に強